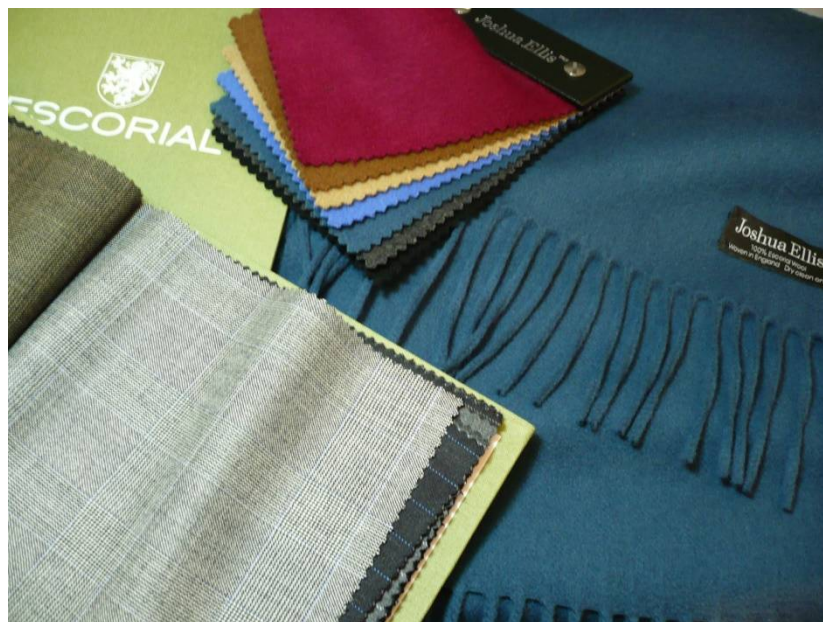


Long Journey of Escorial wool



TAILOR ISHIDA, KOBE
<http://www.oshitate.com>

羊毛の最高峰、エスコリアルウールのご紹介です。

このエスコリアルウール、現存する頭数が CITES (サイテス=ワシントン条約) で絶滅危惧種に指定されているビキューナより少ないといわれ、羊毛の採取量もカシミアの 1%以下と、極めて希少な素材です。



The Escorial Company Ltd.の HP より

エスコリアルウールの原毛の直径は 17 ミクロン、スーパー130's に相当します。

そう考えると、毛の細さはごくごく一般的なレベルですが、なんといっても、1cm で 8~13 回のクランプ (縮れ) があり服地においても比類のない伸縮性があります。

また、そのクランプのお蔭で、糸の中に空気という最大の断熱材が閉じ込められ、夏は涼しく、冬は暖かい服地となります。

もちろん、弾力性のある手触りはカシミアに匹敵し、しわの回復力も優れています。

このエスコリアルウールは、いくつかの「偶然」と「先見の明」によって、現在に受け継がれています。



14 世紀、北アフリカのマグレブ原産のこのミニチュアシープは、

ムーア人 (アラビア語を話すイスラム教徒) のイベリア半島侵攻の際に、スペインに持ち込まれました。❶

15 世紀後半、スペイン軍によってグラナダが陥落し、イベリア半島よりイスラム勢力が一掃されましたが、これらの羊はそのままスペインに残されました。

その後、この中でも最良の種はスペイン王室の所有となり、マドリッド北部の草原に放牧され、その服地はヨーロッパ中の王室で珍重されました。

16世紀、スペイン帝国が最盛を迎え、時の王、フェリペ二世がマドリッド近郊のエスコリアル村にエル・エスコリアル宮殿を建造、これらの羊を集めてその宮殿内で飼育を始めました。^②
(エル・エスコリアルは宮殿、修道院や歴代の王の霊廟を兼ね備える、複合施設だったようです。)

17世紀、エスコリアルシープは多いときで40000頭を数え、スペイン王室は、国外への持ちだしを厳しく禁止しました。(禁を犯すと極刑である「死刑」だったようです。)

18世紀の1765年、時の王、カルロス三世は、自らその禁を破り、いここであるザクセン候に100頭の羊を寄贈しました。^③
ザクセン候はこれらの羊を大切に飼育し、当時、世界で一番高価なウールとしての地位を確立しました。
(現在、エスコリアルウールの羊そのものはサクソン=ザクセン種と呼ばれています。)

一方、19世紀にはナポレオンのスペイン侵攻により、スペイン国内の羊は絶滅し、純血種はザクセンに残るのみとなりました。

1829年、「先見の明」のあるスコットランド人女性、エリザ・ファーロングによって、ザクセンの羊から120頭が選ばれ、スコットランドに送られました。^④
そして、1830年、彼女と二人の息子がこれらの羊とともにタスマニア島に上陸、現地の飼育業者によって、純血が保たれました。^⑤

エリザ・ファーロングの「先見の明」...

20世紀、第二次世界大戦の戦時下、ナチスドイツの司令部は、ドイツ国内のすべての緬羊(羊毛を採るための羊)を食用種と交配させることを命令しここに、ドイツにおけるサクソン種の純血種は姿を消しました。

1967年、当時、奨学生であったピーター・ラドフォードがタスマニア島を訪問した際にこれらの羊の素晴らしさを見出し、飼育業者、製織業者とともに研究を重ね、エスコリアルウールを再生させました。

彼は、現在、The Escoria Company Ltdの社長として、世界中のエスコリアルウールのサプライチェーンを指揮しています。

現在、英国においては、限られたミルのみに供給されており、ウーステッドのスーツ生地は、John Foster、フランネルおよびジャケット生地は、Reid & Taylor、コート生地およびマフラーは、Joshua Ellisが製作しています。